長野県更埴市粟佐遺跡群

五輪堂遺跡 III

——屋代南高校改築に伴う発掘調査報告書——

1985

更埴市教育委員会
更埴市遺跡調査会

序

このたび、屋代南高等学校改築に伴う発掘調査が行われました五輪堂遺跡は、今までに5次にわたる調査が行われており、古墳時代から平安時代の住居址が100棟も検出され、市内屈指の遺跡であることが知られています。特に、昭和57年に屋代南高等学校体育館建設に先だって実施された調査では、火葬墓からは6点の完形土器が出土し、現在、市の指定文化財となっております。これらの中には遠く、尾張、美濃地方から伝えられた優品が含まれており、古代より深い関係があったことが伺えます。また、火葬墓の検出は先人達がいちはやく仏教文化を取り入れたことを物語っているとも思われ、当地方の文化の高さを示す貴重な資料といえるでしょう。

こうした私たちが住む郷土の歴史がいつごろ、どのようにして始まったかということは、誰もが知りたいと望むところでありますが、本書がそうした地域の人々の歴史を考えていく上で何らかの参考になれば幸いです。

調査を無事終了することができましたのは、屋代南高等学校小松一弘校長先生、教職員のみなさん、作業に参加された作業員の方々の御協力と御努力に心から御礼申しあげます。

昭和61年3月31日　更埴市教育委員会教育長
更埴市遺跡調査会会長
和田　基

目　次

I　調査に至る経過……1
II　調査の概要……2
III　調査日誌……3
IV　遺跡の環境……4
V　遺構と遺物……6
VI　まとめ……12
VII　図版……13

例　言

1、本書は、昭和60年7月11日から同年8月7日の間に、長野県屋代南高等学校改築に先だって実施された発掘調査報告書である。

2、本書の編集は佐藤信之が行い、実測、トレースは山根洋子、前島　卓、田中富子、佐藤が行った。

3、執筆は佐藤が行った。

4、出土遺物及び遺構については、上山田小学校の森嶋　稔氏の御教示を得た。

5、本調査の遺物、実測図、写真等はすべて更埴市教育委員会に保管されている。

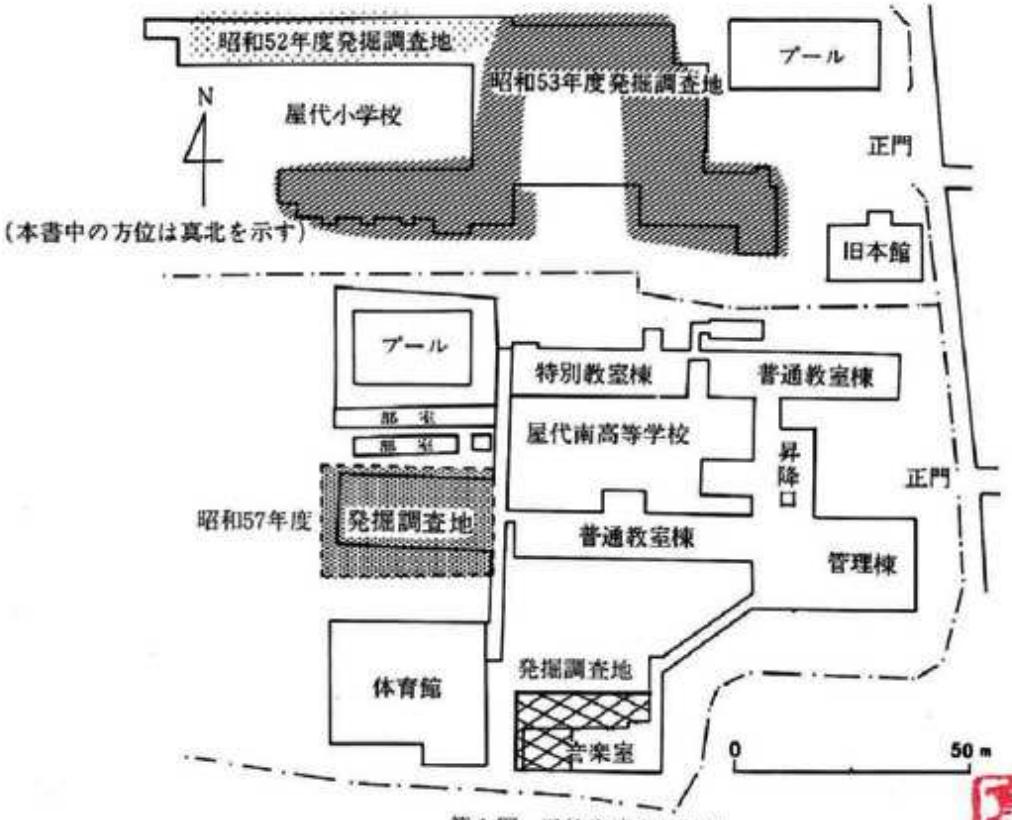
なお、本調査関係の資料には、五輪堂遺跡南校地点を略しGRMIIIと表記した。

Ⅰ　調査に至る経過

昭和59年10月、屋代南高等学校改築に伴う発掘調査について、学校側より依頼のあった発掘調査計画書を作成し、県教育委員会へ提出した。11月6日、県教育委員会より460㎡以上の調査を実施し、費用は4,000,000円という指導がなされた。市教育委員会は、それを学校側に連絡し、調査件数の多い60年度の日程等の準備を開始した。

昭和60年7月1日、屋代南高等学校と更埴市との間で委託契約が結ばれ、続いて更埴市と更埴市遺跡調査会の間に契約が結ばれた。発掘調査は屋代高校改築に伴う馬口遺跡の調査が終了しだい、開始することとした。7月10日、発掘調査通知（98条2）を提出し、7月11日より調査を開始した。当初、今回の調査地点は昭和57年度に体育館建設に伴う発掘調査として実施され、30棟以上の住居址が検出された地点に東接する部分であるため、かなりの密度で遺構の検出があると思われたが、遺跡の縁辺部にあたるらしく、その数は少なかった。また排土場所を調査区周辺に確保でき、移動の必要がなくなったため、その後、契約変更を行うこととなった。

発掘調査は、更埴市から委託を受けた更埴市遺跡調査会が発掘調査団を編成して実施された。調査にあたっては、屋代南高等学校をはじめ、多くの方々より一方ならぬご協力を得た。



第1図　五輪堂遺跡調査地

附属図書館 貴重書部分館

II　調査の概要

1　発掘調査委託者　長野県屋代南高等学校
2　発掘調査受託者　更埴市・更埴市遺跡調査会
3　発掘調査実施者　更埴市教育委員会・更埴市遺跡調査会
4　発掘調査場所及び土地の所有者　更埴市大字屋代 2,104 番地　更埴市大字屋代 2,104 番地　長野県屋代南高等学校校長　小松一弘
5　発掘調査遺跡名　栗佐遺跡群五輪堂遺跡（市台帳No.18－28－1）
6　調査の目的　屋代南高校増築に伴う当該遺跡の記録保存
7　調査期間　昭和 60 年 7 月 11 日～同年 8 月 7 日（27 日間）
8　調査面積　400 ㎡
9　調査方法　グリッド調査法（3×3 m）
10　調査費用　費用総額 3,200,000 円
11　調査会の構成

会長	和田　基	更埴市教育委員会教育長
理事	久保忠一	更埴市議会社会文教委員会副委員長
	山崎　衛	更埴市教育委員会教育委員長
	島田弘三	更埴市区長会長
	小川　茂	更埴市役所総務課長
監事	武井隆義	更埴市社会教育委員会委員長
	小林　栄	更埴市会計課長
幹事	飯島　忠	更埴市教育委員会社会教育課長
	渡辺好和	更埴市教育委員会社会教育係長
	矢島宏雄	更埴市教育委員会社会教育主事

12　調査団の構成

団長	和田　基　更埴市教育委員会教育長
調査指導	森嶋　稔　上山田小学校教諭
調査担当者	佐藤信之　更埴市教育委員会社会教育課
調査員	福沢幸一
現場作業員	岩佐久子　牛沢一子　久保啓子　久保　操　小林芳白　坂口城子　篠崎節子　高野貞子　竹元有女子　田中千枝子　田中富子　松本秋夫　村山　豊
整理作業員	青木美和子　牛沢一子　小林昌子　田中富子
調査協力者	長野県屋代南高等学校
事務局	飯島　忠　渡辺好和　平林喜代士　矢島宏雄　佐藤信之　浦野俊浩　田中啓子　山根洋子（社会教育課）

Ⅲ　調査日誌

7月11日　発掘調査機材搬入し、明日からの調査に備える。

7月12日　本日より重機入り上部の砂層を取り除く。当初排土を30mほど北側へ移動する予定であったが、調査区周辺に排土場所の確保ができた。

7月15日　作業員入り掘り下げを始める。住居址と思われる落ち込みを検出。

7月18日　竪穴式住居址5棟、掘立柱建物址2棟を本日までに検出。

7月20日　1号、2号住居址掘り下げ開始、遺物の出土はほとんどない。

7月22日　掘立柱建物址、3号住居址掘り下げ開始。

7月24日　3号住居址より完形の甕が出土したため、南側を拡張する。実測を始める。

7月25日　1号住居址掘り下げ完了、6号、7号住居址にトレンチを入れ、切り合いを調べるが不明。

7月29日　拡張を終えた3号住居址を掘り下げる。遺物多数出土。

8月　5日　掘立柱建物址掘り下げ、遺物の出土はまったくない。

8月　7日　測量会社により基準点測量を行う。遺構の掘り下げは本日をもって終了した。

8月　8日　残った部分の実測を行い発掘調査を終了する。

8月10日　重機による埋めもどし終了。

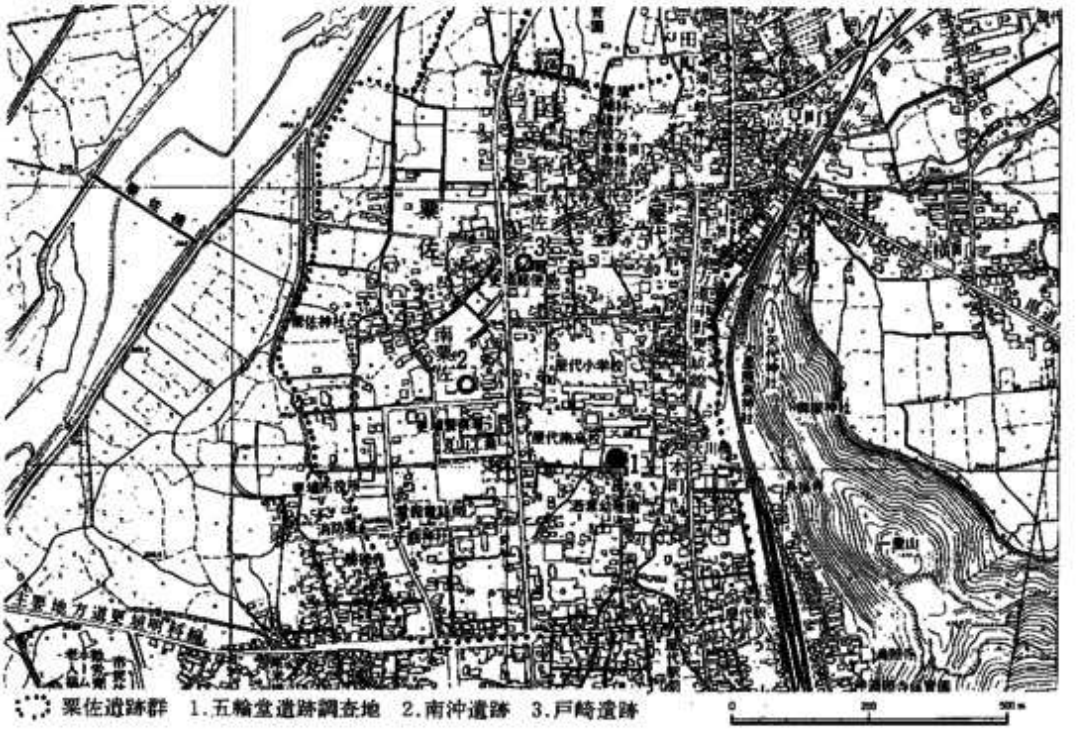
第2図　調査風景

Ⅳ　遺跡の環境

栗佐遺跡群は、北流する千曲川が北東に流れを変える屈曲部に中洲状に形成された微高地上に、東西0.5㎞、南北1㎞にわたって展開している。同遺跡群内には北村遺跡、宮浦遺跡、戸崎遺跡、南沖遺跡そして今回調査を実施した五輪堂遺跡がある。五輪堂遺跡は中核的な遺跡として存在しており、地形的に見ても標高360.5ｍ前後と自然堤防の背にあたり、水害時を考えても最適地といえる。しかし、遺構上面には60㎝を越える砂層があり、本遺跡に暮らした人々も常に水害と戦っていたことを示しているといえよう。

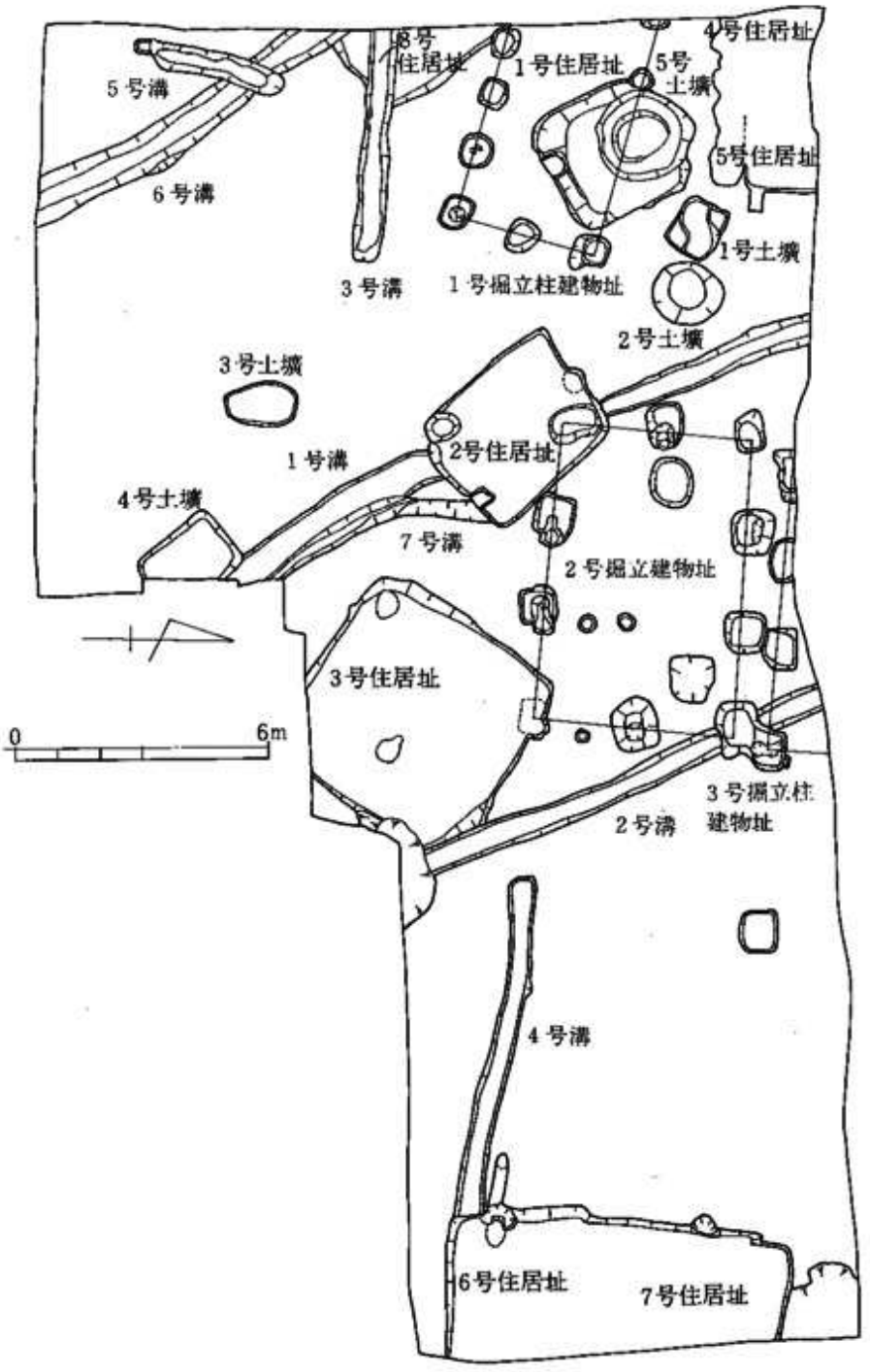
五輪堂遺跡は屋代小学校、屋代南高等学校の改築に伴う5回の調査により、古墳時代から中世に至る大集落であったことが知られており、約100棟の住居址、7棟の掘立柱建物址の他、火葬墓、馬の墓、堂址、溝などが検出されている。特に中世堂址の存在は、遺跡名にもなっている字名との関係が指摘でき興味深い。

中世には東方300ｍに存在する一重山に、屋代氏によって築城された屋代城がある。この地方では最も規模が大きくまた整った山城であり、善光寺平南域で展開した、いわゆる川中島の戦いとも関係している。江戸時代に入り、北国街道が整備されると、矢代宿は松代方面と善光寺方面の分岐点として重要な地位を占めるようになった。



栗佐遺跡群　1.五輪堂遺跡調査地　2.南沖遺跡　3.戸崎遺跡

第3図　発掘調査位置図


8号
住居址
1号住居址
5号
土壙
4号住居址
5号溝
5号住居址
6号溝
1号土壙
3号溝
1号掘立柱建物址
2号土壙
3号土壙
1号溝
2号住居址
4号土壙
7号溝
2号掘立建物址
3号住居址
0
6m
3号掘立柱
建物址
2号溝
4号溝
6号住居址
7号住居址

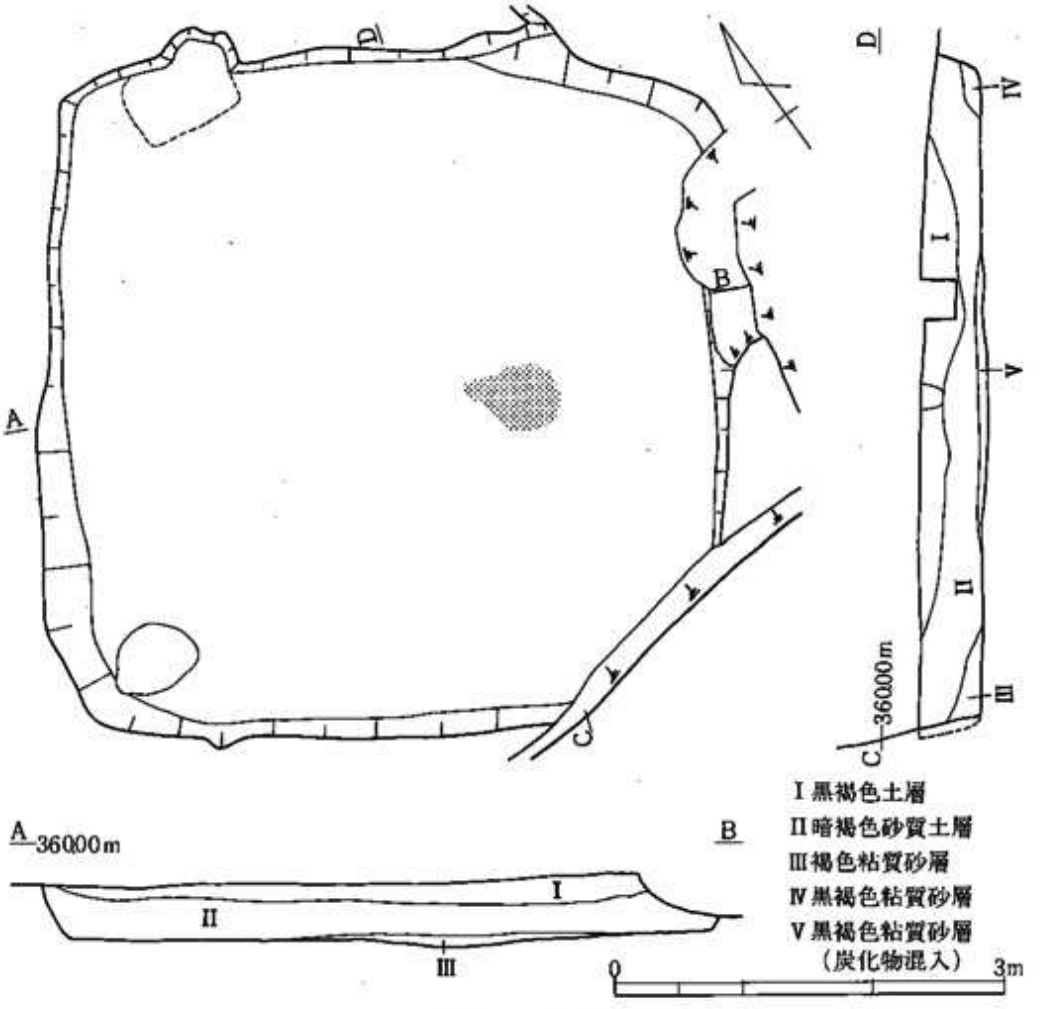
第4図　遺構全体図

V　遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、古墳時代前期の住居址２棟、後期の住居址２棟と、平安時代の住居址４棟、掘立柱建物址３棟、時代を判定できない溝８本などである。当初、かなりの密度で遺構が存在するものと思われたが、遺跡の縁辺部となるらしく、遺構の存在は予想したほどではなかった。

３号住居址

遺　構　調査区中央より検出された遺構で、掘立柱建物址、溝、攪乱などで壁の一部が破壊されているが、いずれも床面までは、達していない。規模は5.3ｍ×5.2ｍほどの比較的整った方

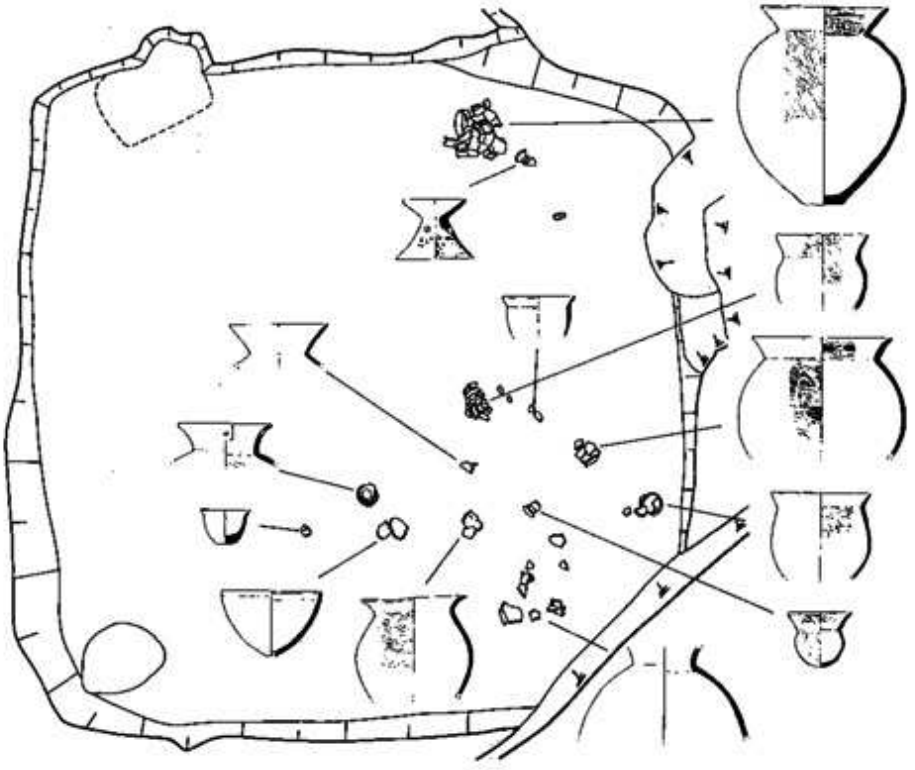


第５図　３号住居址

形で、やや胴張りとなっている。主軸方向をN－55°－Wに持つ。壁高は40㎝前後を測ることができるが軟弱であった。床面は平坦で明確に検出することができたが、それほど堅緻ではない。炉は住居址の中央から南東壁へ寄って作られており、壁からは1.2ｍほどの間隔がある。掘り込みなどはまったくなく、洋梨形に焼土が検出されているだけである。柱穴、周溝等は検出できなかった。

遺　物　遺物の出土状態を見ると、南東壁側にまとまって出土しているが、供膳形態、煮沸形態といったかたまりは見られない。実測したものの多くは、１ヶ所よりつぶれた状態で出土したものであるが、ほとんど底部を持っていない。

１は椀形の土器で、小形ではあるが指オサエの後ナデを施し、ていねいに仕上げている。２も同形で、体部には荒いハケが施されている。３は器台で体部は直線的に作られており、口縁端部はヨコナデにより垂直に面取りされている。わずかに外反しながら開く脚部には３孔が穿たれている。５は甑で、弯曲しながら立ち上がる体部にはミガキが施され、底部には径１㎝ほどの小孔が１つ穿たれている。６は完形のまま出土した小型丸底坩で、底部から胴部には鋭いケズリが施されており、一部ではケズリすぎにより穴があいてしまい、粘土をあてて補修している部分が見られるが、完全には塞がっていない。７は壺あるいは坩と思われる口縁部で、ていねいなミガキが行われている。８は壺の口縁部で、細かなハケにより整形され、口縁部には焼成前に貫かれた小孔が見られる。９は大形で球形胴を持つ壺である。10～22は甕である。10･11は荒いハケで整

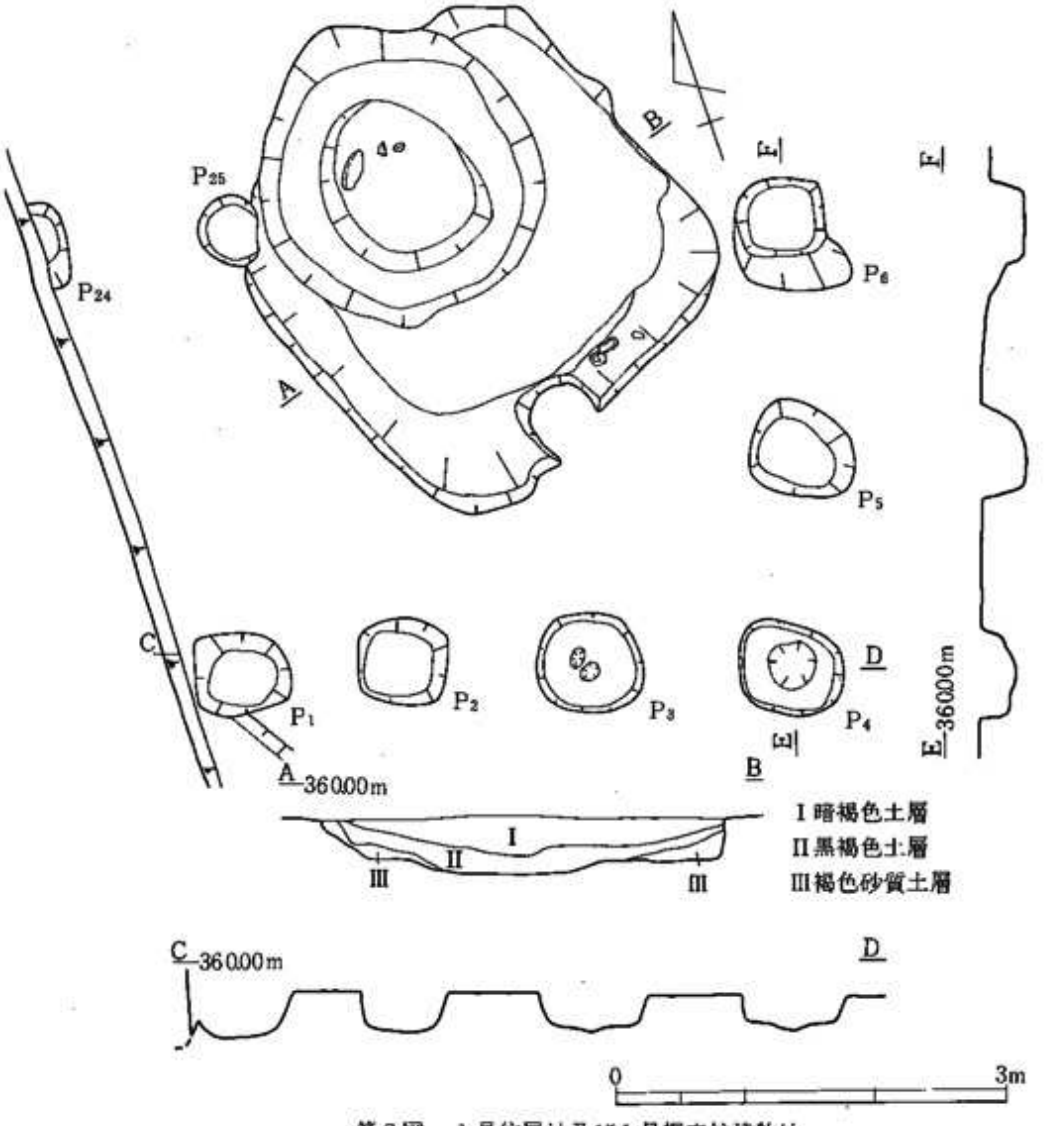


第６図　3号住居址遺物出土状態

形され、口縁部にはヨコナデも見られない粗末なものである。12は口縁部が大きく外反しており、胴部には横位のハケを施している。13は球形の胴部から、くの字状に開く口縁部が取り付けられており、胴部には12同様横位にハケを施している。14は胴下半部はナデ、上半部をていねいなハケで仕上げている。最大径は胴部のかなり高い位置にある。15はS字状口縁台付甕の破片である。胴部、台部の破片も出土しているが接合できない。16～22は櫛描の波状文、簾状文をもつ甕の破片である。本住居址に関係するかどうかは明確でないが、出土は本住居址覆土内に限られている。

8号住居址

遺　構　調査区東側より検出された住居址で、3分の2以上が調査区外にある。規模は不明で



第7図　1号住居址及び1号掘立柱建物址

あるが、主軸はN－40°－Wに持つものと思われる。壁高は35㎝前後を測るが、溝等による破壊が激しい。床面は明確に検出できたが軟弱であった。

遺　物　S字状口縁の甕とわずかの小片が出土しただけである。口縁部は大きく外開し端部は丸く作られている。胴部にはハケが施されているが、肩に水平方向に施すハケは見られない。また頸部内面にハケも見られない。胎土は良く精練されているが、在地の土器に近い。

1号住居址

遺　構　1号掘立柱建物址、5号土壙に切られて検出された遺構である。規模は3.1m×3mと小さな方形で、主軸方向をN－23°－Wに持っている。床面は堅緻であったが中央部に向かうにしたがって低くなっており、深さは最大で40㎝ほどを測るが、壁高は20㎝ほどである。カマドは南壁やや西側に作られた粘土製カマドで、中央に高坏脚部を転用した支脚が立てられていた。

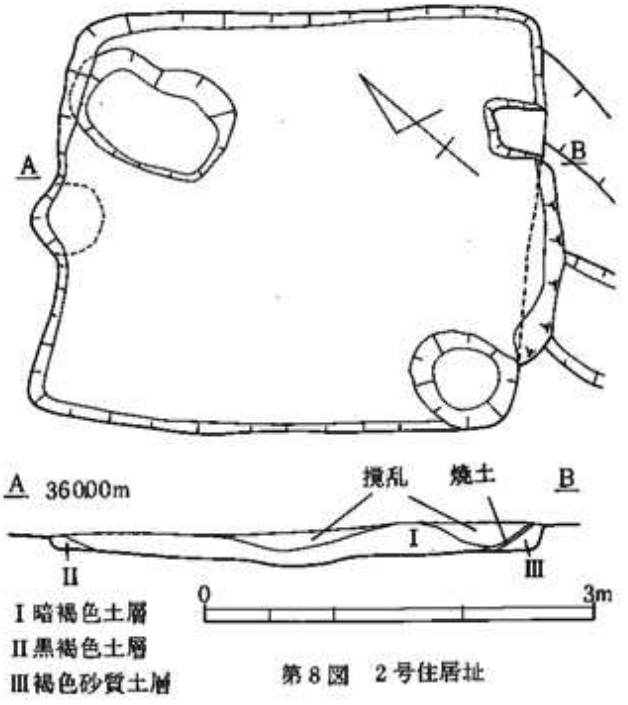
遺　物　当初土壙との切り合いがわからなかったため、土壙の遺物も含まれている可能性が高い。1～3は内面黒色処理された坏で、いずれも丸底になるものと思われる。ヘラケズリの後ミガキを施し仕上げているが、1はケズリの痕跡を顕著に残している。4・5は高台を持つ須恵器の坏であるが、5は底部が張り出しており、高台の役割を果たしていない。6は支脚として利用されていた高坏の脚部である。7は須恵器の蓋で、器高が高く、全体に丸味を帯びている。8は長胴の甕で、胴部内外面には、甕としてはていねいなナデが施されている。

1号掘立柱建物址

遺　構　西側が調査区外となるため、全容はつかめていない。規模は5.m×3.5mほどで、4間×2間の建物が考えられ、長軸方向はN－74°－Wに持っている。掘方は径70㎝前後の円形あるいは不整方形で、深さは35㎝ほどを測れる。出土遺物は少ない。

2号住居址

遺　構　2号掘立柱建物址、溝に切られて検出された住居址である。規模は3.6m×3.2mほどの不整方形で、主軸方向をN－30°－Wに持ち、ほぼ1号住居址と一致している。壁高は20㎝前後で、床面は平坦であったが軟弱で

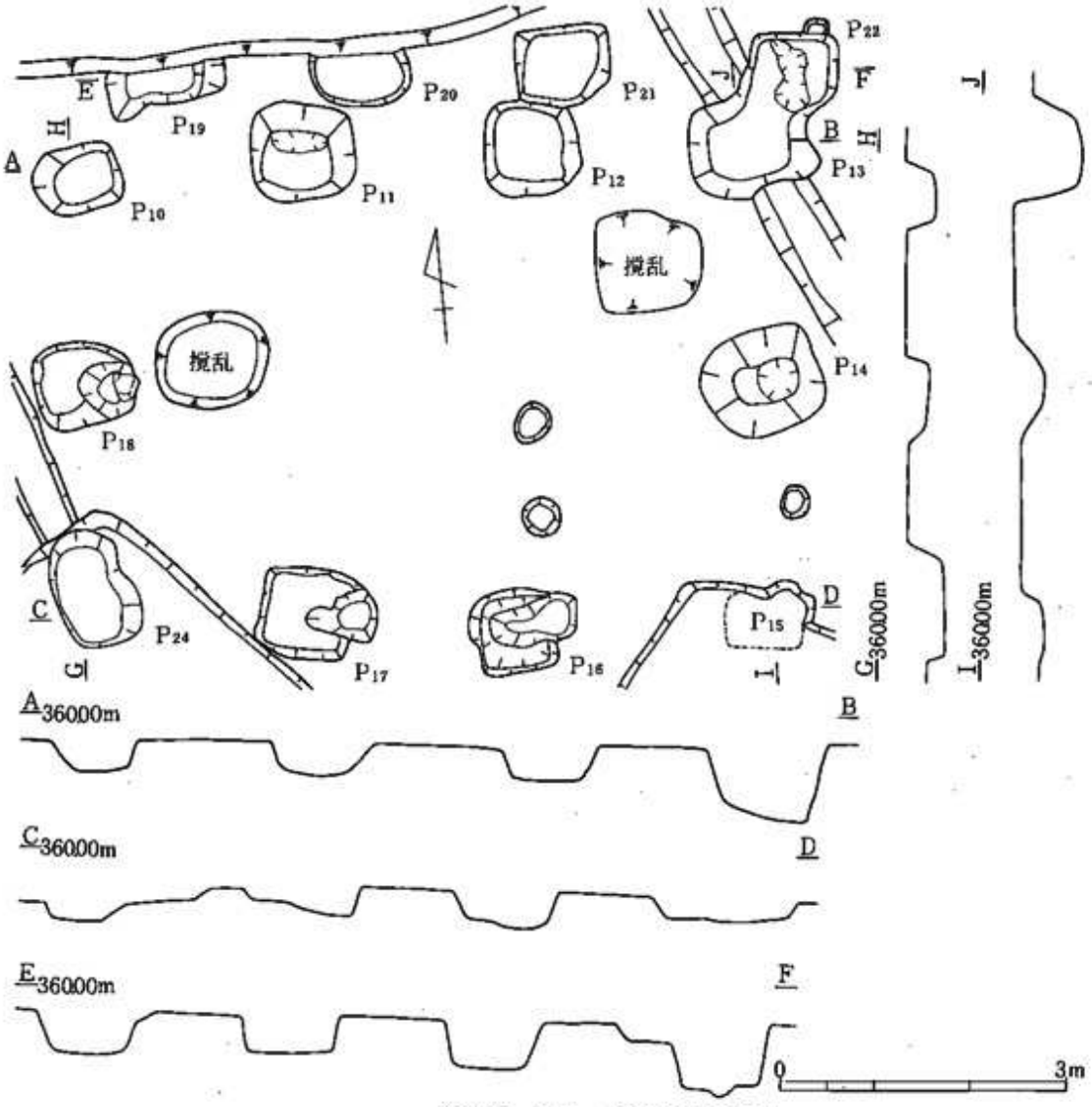


第8図　2号住居址

あった。カマドは南壁やや東寄りに作られた粘土製のカマドであったと思われるが、すでに大半が壊れていた。出土遺物は須恵器大甕の破片が1片出土しただけで、他は極小の破片がわずかだけであった。

2号掘立柱建物址

遺　構　調査区のほぼ中央より検出された建物址である。規模は7.3m×4.8m前後で、3間×2間となる。長軸方向はN－83°－Wに持っている。掘方は1m前後の方形であったと思われるが、かなり崩れているものも見られ、深さは25cm～70cmと一定していない。P16、P17、P18、には、掘方を切る形でピットがあり、柱の抜き取りが行われているかもしれない。出土遺物は極小



第9図　2号・3号掘立柱建物址

の破片で、混入したものと思われる。

3号掘立柱建物址

遺　構　2号掘立建物址の北側にあたり、調査区外へ拡がっている。規模は梁行が6.8m前後で、3間であるが桁行は不明である。掘方は2号掘立柱建物址同様1m前後の方形となっており、深さは45cm～90cmほどである。2号掘立柱建物址との間には切り合い関係があるが明確にはできなかった。ただ、掘方、規模、長軸方向等共通する部分が多く、時期的にはほとんど差がないものと思われる。出土遺物はない。

1号土壙

遺　構　1号住居址の東側より検出された遺構である。径1.6mほどの円形の掘り込みで、深さは60cmを測る。底部は砂層下部に存在する河原石層にまで達しているため、平坦面を持っていない。東壁は焼けて焼土化していた。

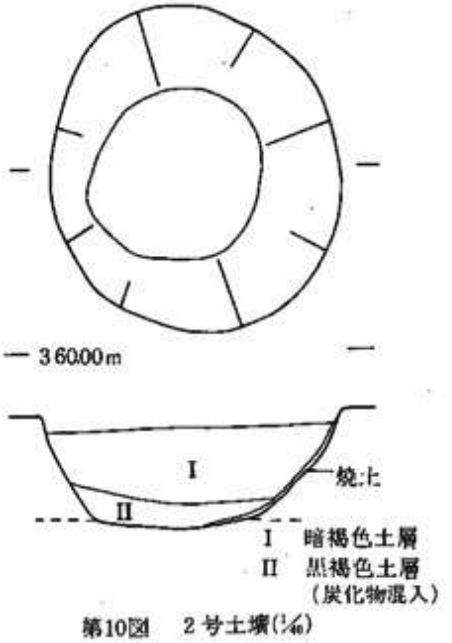
遺　物　長胴の甕の破片が出土している。胴部外面はタテハケで整形されており、内面は顕著な接合痕を境に下部がヨコハケ、上部がナデとなっている。

その他の遺構

他に4棟の住居址が検出されているが、いずれも住居址の一部にすぎない。4棟とも壁面を四方位とほぼ一致させており、奈良・平安時代の住居址と考えられる。4号、6号住居からはカマドも検出されているが、4号住居址が東壁に作られているのに対して6号住居址は西壁に作られている。

遺物の出土は極端に少なく、図化できるものは5点のみである。1・2は4号住居址より出土した須恵器で、1は底部をヘラケズリで仕上げている。3～5は6号住居址より出土した須恵器坏であるが、底径が大きく、ヘラケズリを施しているものと、小さな糸切り底となる2種があり、混在しているものと思われる。

溝は8本検出されているが、その性格、所属する時代を判断できたものはない。ただ1号、2号、6号の溝は、その方向を一致させており、幅60cm～100cm、深さ20cm～40cmほどと、似た規模であることからなんらかの関係があったものと思われる。他の溝も掘りこみは、しっかりしたものであった。



第10図　2号土壙(1/40)

VI　ま　と　め

昭和60年度は発掘調査が重なり、時間的に十分な調査ができるか心配されたが、さいわい天候にも恵まれ、五輪堂遺跡の重要性をさらに深めることができた。

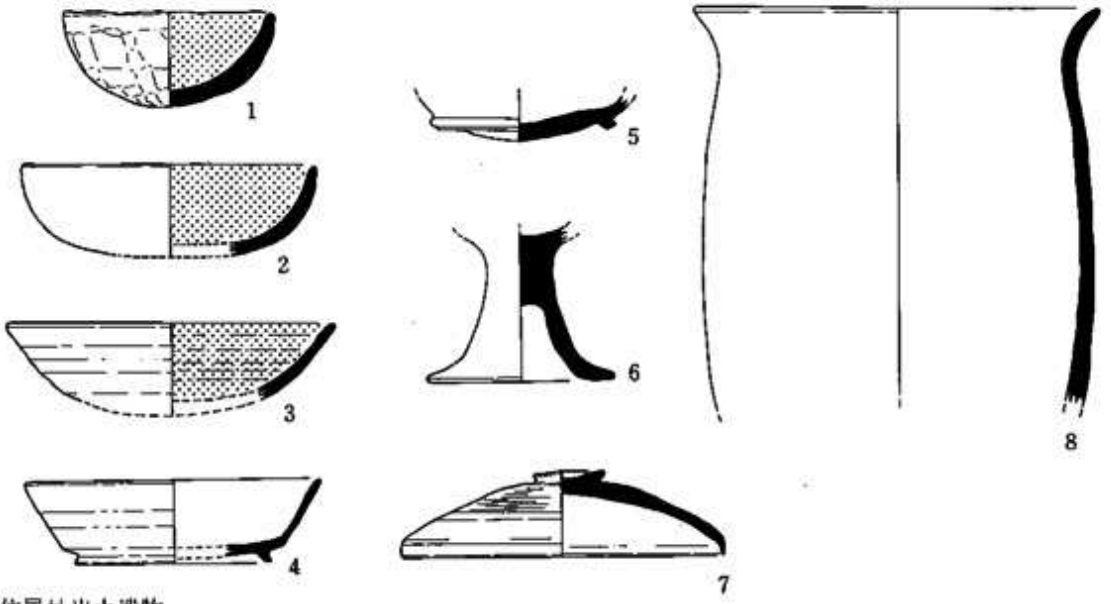
3号住居址出土の土器群は、善光寺平における4世紀から5世紀への移行を考える上で、極めて重要な一群といえる。4世紀の土器については青木一男氏(1984)らによってIII期区分が行われている。それによると、I期　箱清水式土器の終末期、II期　箱清水式土器の変化が著しい時期、III期　箱清水式土器の系譜上にあるものがほとんど見られなくなる時期、とされている。3号住居址の一群は、椀、小形丸底坩、器台、甑、坩、壺、甕、S字状口縁台付甕によって構成されており、器台、S字状口縁台付甕等から、一応III期と考えておくが、種々の問題点が指摘できる。たとえば小型丸底坩である。口縁部に対して胴部が大きく、器高も大形化している。このような傾向は、より後出する小型丸底坩に見られるものである。また甕においても同様である。箱清水式土器の系譜を最後まで残していたのが甕であり、III期の土器においても、更埴市灰塚遺跡1号住居址などの甕には、その流れを見ることができるものが含まれている。本址より出土した甕も図版2－13などは、胴下半部の整形に箱清水式土器の影響を見ることができるが、口縁部などは、強く外反する、くの字状口縁となっている。また本址の覆土中のみより検出された櫛描文の破片がもつ意味も大きい。このように4世紀を解明する重要な鍵を、本址出土の資料は持っているといえよう。

8号住居址出土のS字状口縁台付甕が持つ意味も大きい。最近、善光寺平においてもその検出が増えてはきているが、まだ不明の点が多い土器である。8号住居址出土のS字状口縁台付甕はいわゆるBタイプであり、頸部内面に見られるハケや、肩に水平方向に施すハケも見られない。胎土も在地の土器と同じであり、善光寺平で最も新しいS字状口縁台付甕の1つといえよう。

五輪堂遺跡ではこれまでに5次にわたる調査が行われ、100棟ほどの住居址が検出されたことはすでに前記したが、いずれも高い密度での住居址検出であったのに対して、今回の調査で検出された住居址は8棟とかなり少なかった。このことは五輪堂遺跡の南限に近づいたことを示すと考えられる。遺跡の拡がりは、農耕地や山林といった自然地形を残している所ならまだしも、市街化が進んだ地域でそれを地形からつかむことは不可能に近い。そうした中にあって、屋代小学校を中心とする五輪堂遺跡（集落）は今回の調査地点が南限となることを確認できたことは大きな成果であった。今後の調査により残った北、東、西方面への拡がりを把握することができれば、個々の遺構にとどまらず、集落としての規制、特性にせまることができよう。

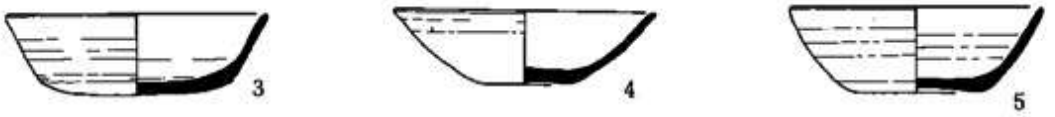
最後に本調査にあたっては、発掘調査に全面的に御協力くださった長野県屋代南高等学校、暑い中作業に参加くださいました作業員のみなさまに心からなる謝意を表し、今後の発掘調査への御協力をお願いするところであります。

1 号住居址出土遺物

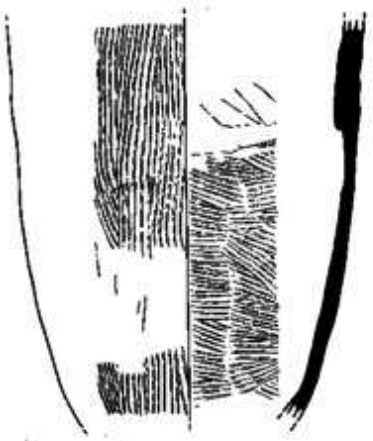


4 号住居址出土遺物

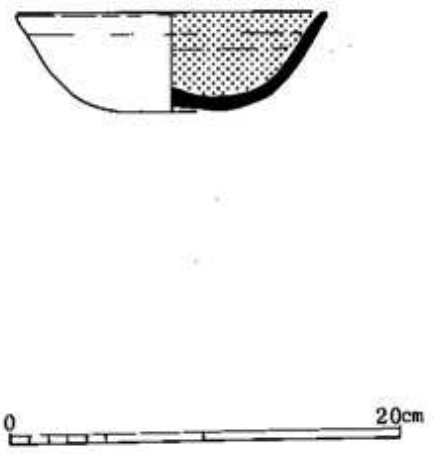
6 号住居址出土遺物



2 号土壙出土遺物

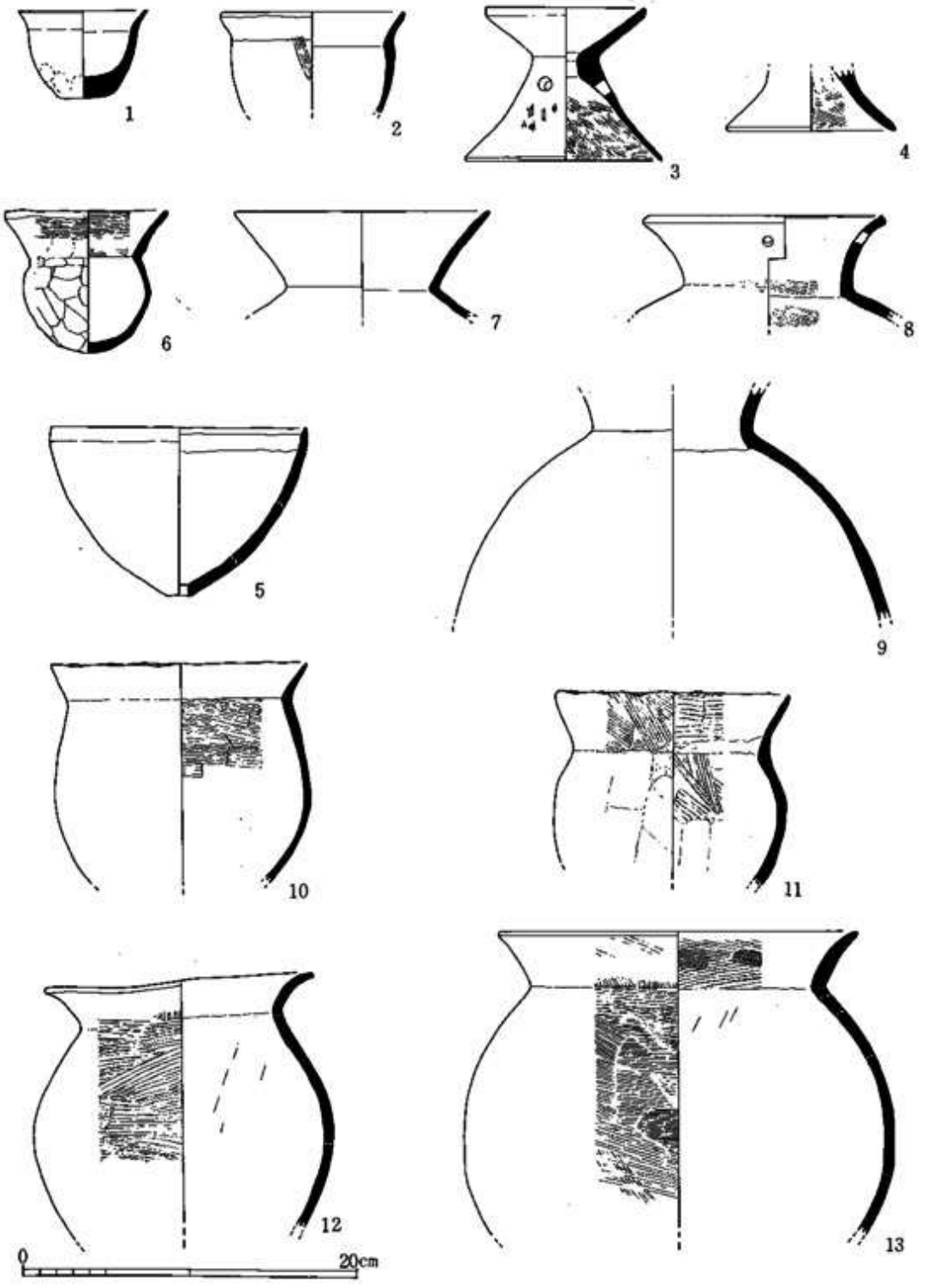


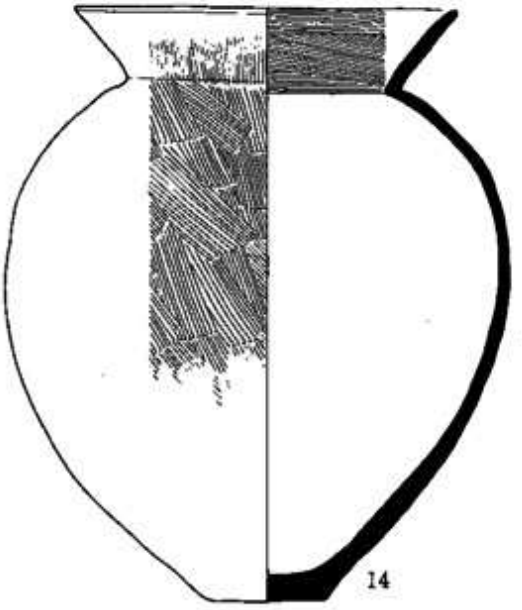
グリッド出土遺物

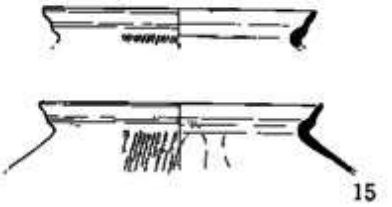


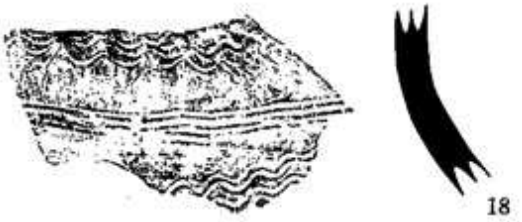
図版 2

3 号住居址出土遺物









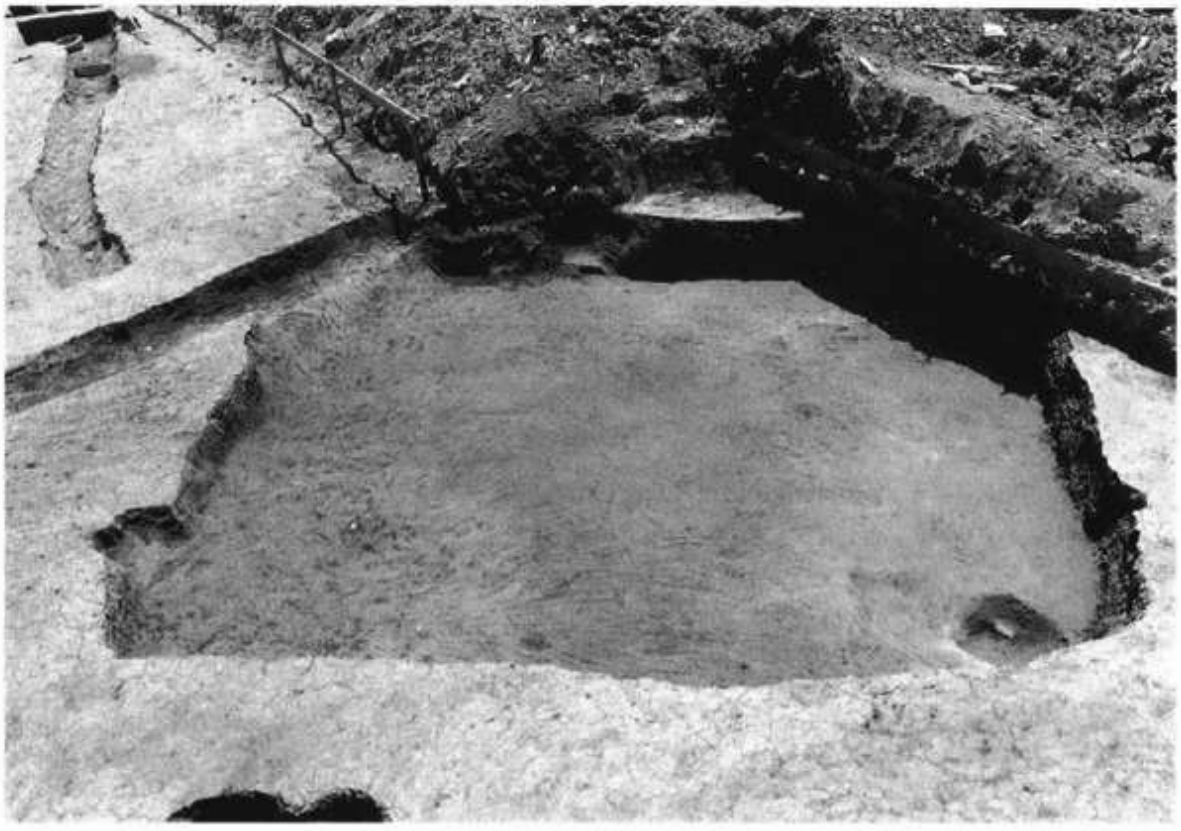
8 号住居址出土遺物

※拓本は½

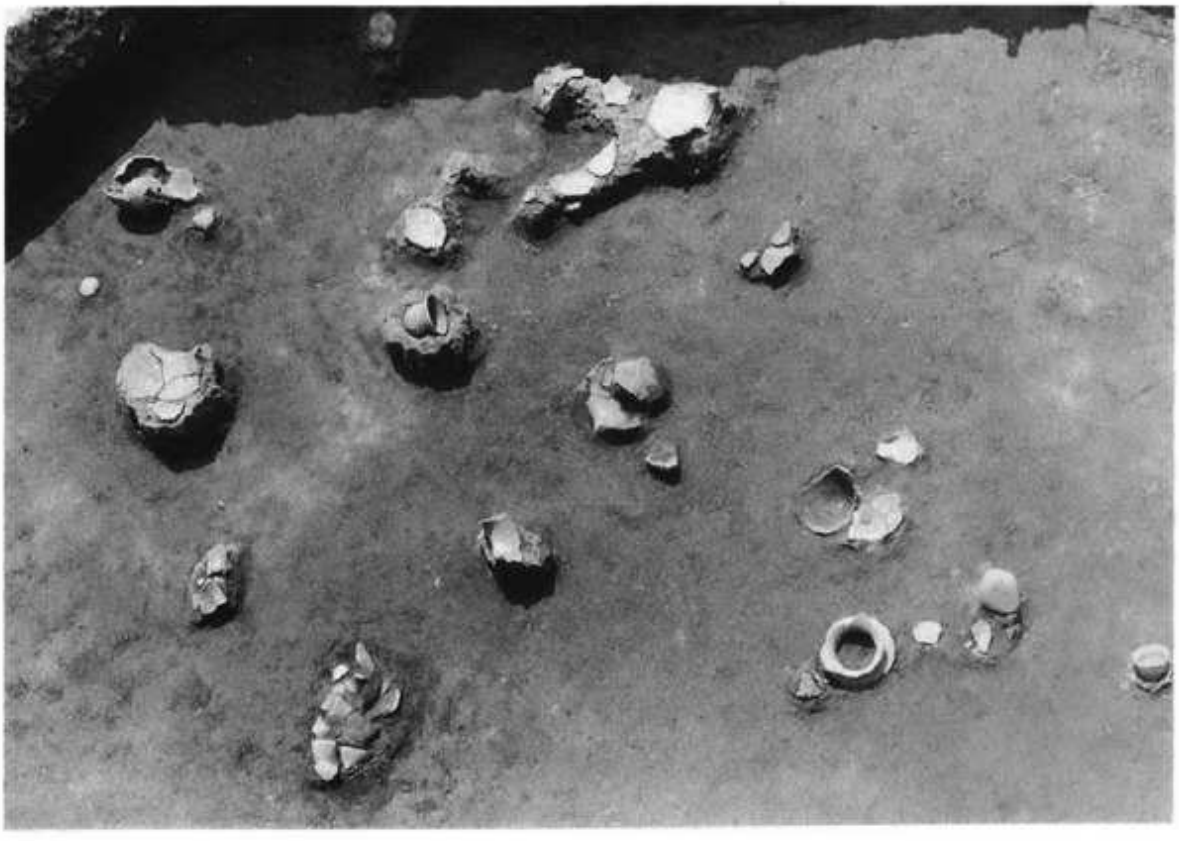
図版 4

調査区全景

調査区中央



3 号住居址



3 号住居址遺物出土状態

図版 6

1 号住居址及び 1 号掘立柱建物址

2 号住居址

2号・3号掘立柱建物址

1号住居址及び8号住居址出土遺物

3－14

2－8

2－12

2－11

2－10

2－1

2－5

2－3

2－6

3号住居址出土遺物

五輪堂遺跡 III　屋代南高校改築に伴う発掘調査報告書

発行日　昭和61年3月31日
編　集　更埴市遺跡調査会
発　行　更埴市教育委員会
〒387　長野県更埴市大字杭瀬下762－2番地
TEL（0262）73－2791
印　刷　ほおずき書籍株式会社
〒380　長野市中越293
TEL（0262）44－0277